

社会事象を自分ごとに捉え、 思考力、判断力、表現力を育てる社会科 ～討論のある問題解決的な学習を通して～

長谷川 寛

1 はじめに

社会科学学習の中で、思考力・判断力・表現力は、討論のある問題解決的な学習を単元もしくは一時間の授業の中で展開することによって、より効果的に育てることができる。

なおかつ、子どもたちが問題として関わっている社会事象を自分ごととして捉え、問題解決に向かったときほど、効果的に思考力、判断力、表現力を育てることができる。

このことを本文の中で述べていきたい。

2 思考力・判断力・表現力の育成と言語活動の充実、問題解決的な学習の必要性

学校教育法第30条第2項に「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」とあり、学力の重要な3つの要素の2つ目として「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」を挙げている。

これらを受けて現行学習指導要領総則第1教育課程編成の一般方針1の中で、「各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展

開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、(略)」とし、思考力、判断力、表現力を重要視している。

このことは、新指導要領の総則第1小学校教育の基本と教育課程の役割3の中でも「児童の発達段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。(3) 思考力、判断力、表現等を育成すること」とあり、思考力、判断力、表現力の育成が求められている。

さらに、全国学力・学習状況調査等の学力に関する各種の調査結果により、我が国の子どもたちには、思考力、判断力、表現力等に課題があり、思考力、判断力、表現力等の育成が必要であるとされた。

また現行指導要領総則第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項に「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」とあり、思考力、判断力、表現力の育成のために言語活動の充実を挙げている。

そして、この思考力、判断力、表現力の育成と社会科とのかかわりについては、小学校社会の目標は「社会生活についての理解を図り、我

が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」となっている。

この公民的資質の基礎とは何かというと、平成20年8月の小学校学習指導要領解説社会編によると、「『公民的資質』とは、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している。したがって、公民的資質は、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。」とされている。また「児童一人一人に公民的資質の基礎を養うためには、社会科の学習において、地域社会や我が国の国土、産業、歴史などに対する理解と愛情を育て、社会的な見方や考え方を養うとともに、問題解決的な学習を一層充実させ、よりよい社会の形成者に参画する資質や能力の基礎を培うことを一層重視することが大切である。」と問題解決的な学習の一層の充実を求めている。

このように社会科の目標は、公民的資質の基礎を養うことである。そのために社会的な見方や考え方を養い、多面的に考えたり、公正に判断したりするために問題解決的な学習を一層充実させ、よりよい社会の形成者になる基礎としての資質や能力を育てることが大切であるとしている。

ということは社会科において充実した問題解決的な学習を行い、思考力・判断力・表現力を育てることが大切であるとしているのである。

3 思考力・判断力・表現力とは

そもそも思考力・判断力・表現力とは、それぞれ何なのか。

思考力とは、子どもたちが発問や疑問点につ

いて、知識・技能を活用して考える力である。問題を発見したり、既にもっている知識や能力を引き出し、資料と結び付けたりして予想したり、分析したり、仮説を設定したりする力であると考えている。

判断力とは、他の人の考えや思いを聴いたり、資料等を読んだり、見たりして自己内対話を繰り返しながら、自分の意思を決定する力であると考えている。

表現力とは、自分の考えや思いを口頭で発表したり、文章や図等にまとめたりする力であると考えている。

また平成29年6月の小学校学習指導要領解説社会編では、「小学校社会科における思考力・判断力は、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会へのかかわり方を選択・判断する力である。」とし、「小学校社会で養う表現力とは、考えたことや選択・判断したことを説明する力や、考えたことや選択・判断したことを基に議論する力などである。その際、資料等を用いて作品などにまとめたり図表などにあらわしたりする表現力や、調べたことや理解したことの言語による表現力を育成することも併せて考えることが大切である。」としている。

4 思考力、判断力、表現力を育てる手立て

(1) 言語活動

平成20年1月の中央教育審議会答申では、思考力、判断力、表現力等をはぐくむための重要な学習活動として

- イ. 体験から感じ取ったことを表現する。
- ロ. 事実を正確に理解し伝達する。
- ハ. 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ニ. 情報を分析・評価し、論述する。
- ホ. 課題について、構想を立て実践し、評価・

改善する。

へ、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

としており、さらに各教科等においても、記録、要約、説明、論述などの言語活動を発達の段階に応じて行うことも重要だとしている。

このように言語活動は、特別に行われるものではなく通常の学習の中で行われることが望ましいと考えている。

(2) 討論

言語活動の充実のために、子どもたちに自分の考えを持たせること、またそれを表現させることが重要である。

そのための方法の一つとして討論がある。

討論の中で子どもたちは、まず自分の意思を決定しようと努力する。そして自分の考えが正しいことを友だちに理解してもらうために、わかりやすく発表しようとする。そのことがまさに表現力である。また友だちの発表を聴いて、自分の考えが正しいか自己内対話を繰り返しながら、自分の意思を決定する。すなわち判断するのである。

また討論を行うことにより、子どもたちはお互いの意見を共感的に聴き合い、互いを認め合いながら自己有用感や自尊感情を持つことができる。そして、協力的、創造的な学級に育てることができるのである。

子どもたちに討論を行わせるためには、以下のような手立てが必要であると考えている。

①自分の考えを持たせる。

主発問後に必ずノートに自分の考えを書かせる時間を確保することである。

主発問を出し、すぐに挙手させ、挙手した子どもの中から指名し、教師が思い描いた通りの解答があれば次に進むケースを見かけるが、これはあくまで反応の速い子どもたちだけの授業になってしまい、子ども主体の授業では決していない。

②振り返りをノートに書かせる。

初めは、一時間の中で自分が考えたことを順に書かせるとどの子どもでも書くことができると思われる。決してうまい文を書こうとしなくても、自分の考えたこと、わかったこと、疑問に思ったこと、不思議に思ったこと等を書かせ、自分の考えをもう一度振り返って確認させることが大切である。

③論点を意識させた討論

討論の中では、できる限り子どもたちが実感の伴った言葉で発表し、理解につなげることができると良いと考えている。

ノートに書くと、子どもたちは討論の中で、ノートで考えた自分の意見を発表する機会を待っていることが多く、討論に参加できない子どもたちが多く見られる。

このことから脱却するために、ノートは自分の考えをまとめる手段とすることを説明しておく必要がある。そして討論になったときには、ノートに書いた自分の考えは持ちつつも、討論の論点になっていることに対する自分の考えを持ちながら討論に加われるよう訓練することが必要になってくる。

このように意図的に日常の学習の中に言語活動を位置づけることによって、思考力や判断力が高まるのではないかと考えている。

(3) 子どもに社会事象を自分ごとと捉えさせる

子どもたちが「なぜ？」と問い、自分たちで解決したいと思った時が、子どもたちにとってもっとも思考が活発になるときである。

それを社会科では、子どもたちに社会事象を自分ごとと捉えさせることができたときであるとしている。これはすなわち子どもたちが実感的、切実になったときと同じであると考えている。

子どもたちが社会事象を自分ごととして捉えるということは、簡単に言うと「子どもたちの目に映っていながら内容が見えていない事柄を、事実として見ること」であると考えている。

(4) 教師の授業感の転換

思考力、判断力、表現力を育てるためには、子どもたちに考える時間を設け、考えや思いを発表させたり、文章にまとめさせたりする、いわゆる子ども主体の授業が必要になる。教える授業、すなわち教師が答えを教える授業（習得型授業）に加えて、育てる授業、すなわち子どもが答えを見つける授業（探究型授業）を行うことが求められているが、教師にとっては授業感の転換がなかなか難しくなっている。

探究型授業のためには、子どもたちが問題について自分自身の力で自発的な追究を始めるようにしたい。

そのためにも社会事象を自分ごととして捉えさせ、討論のある問題解決的な学習を展開しようとする教師の育成が求められる。

2017年6月の小学校指導要領解説社会編にも「問題解決的な学習とは、単元などにおける学習問題を設定し、その問題の解決に向けて諸資料や調査活動などで調べ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、社会へのかかわり方を選択・判断したりして表現し、社会生活について理解したり、社会への関心を高めたりする学習を指している。」とあり、より一層の問題解決的な学習の充実が求められている。

討論のある問題解決的な学習を展開するためには、言語活動の充実が必要であり、子ども同士がお互いの考えを聴き合える授業を展開する必要がある。そのためにも子どもたちに聴く力、見る力、話す力、文や表・図に表す力を育成する必要がある。

5 思考力、判断力、表現力を育てる討論のある問題解決的な学習の授業展開

討論のある問題解決的な学習は、どう展開していくと良いのだろうか。

(1) 1時間の展開

①主発問 … 5分

②予想や自分だったらどうするか考える…

10分

③討論… 25分

④振り返り（わかったこと、思ったこと、疑問等を文章に書く）… 5分

①主発問（＝各時間の課題）

イ. 子どもたちが解決したいと思える発問で、全員が自分の考えを持ちやすい発問

そのためには、子どもたちの身近な事象で、生活に密着した具体的な社会事象を扱うことが必要である。いわゆる子どもたちにとって切実・実感的な問題を扱うことである。

ロ. 理由を書かせる。

一般的な問題解決的な学習では、自分ならどうするか、方法を書かせることはあるが、なぜそういう方法が良いと思っているのか、理由を書かせることが見られない場合がある。理由を考えさせず、自分はどうか方法だけを発表させると、その方法がなぜ良いのか、良くないのか、討論が深まらないことが多い。しかし理由を書かせ、発表することで理由に対する反対や賛成、付け足し等が活発に発表され、討論に深まりが見られることが多い。

②予想したり、自分の考えを書いたりする。

イ. 予想としての意思決定

主発問に対する自分の考えは、あくまでも予想であることを子どもたちと確認しておく必要がある。ここでは正解を求めるのではなく、みんなで学習を進めていくために、その時点の自分の意思を決定することが必要であることを理解させたい。

また主発問に対する子どもたちの考えを持たせることは、当事者の気持ちを共感的に捉えることから、子どもたちに優しさや思いやりが育ってくる。

道徳における問題解決的な学習が求められているが、道徳でもぜひ当事者の気持ちになって学級で話し合う学習を行ってほしい。

ロ. 十分な時間の確保

自分の考えを持つためには十分な時間を確保することが必要である。この時間の中で子どもたちは、自分の経験知等から自分の考え、意思を決定しようとするのである。

ハ．教師のかかわり

この時間に教師が行うこととしては、必ず机間を回り、子どもたちがどのような内容の考えを書いているか知ること、そして座席表や名簿等を用意しておき、メモすることが大切である。

この内容をメモしながらこの後、考えていた通りの授業展開をしていくか、それとも違った展開にするか、この後の展開等を考える時間でもあり、自分の考えを持ってない子どもへの支援の時間でもある。

③討論

子どもたちは、討論をすることにより、友だちの様々な考えの中から自己内対話を繰り返して、自分なりの考えを確立していくのである。

討論の方法としては、まず子どもたちが書いた内容を発表させる方法があるが、発表している間は、討論は進まず、ただ時間がかかってしまうことが多い。そのため、子どもたちに自分の考えを紙に書かせ、黒板に貼っていく方法等時間を短縮するための方法を予め考えておくことが必要である。

また、意見を繋いでいく討論の方法もある。初めに一人に発表させ、その意見に対してみんなの意見を繋げていく方法であるが、これはやや難しい。

子どもたちに指導しておくのは、まず発表の仕方である。「付け足しです。」「今の意見に反対です。」「私も同じだと思います」「なぜなら」等発表の仕方を指導しておくことが必要である。

また、子どもたちにもどうするとわかりやすく説明することができるのか、発表内容を考えさせることも大切である。

さらに、子どもたちの聴き方を指導したい。友だちの発言を受容し、共感的に聴き、自分と

の相違点について、自己内対話を繰り返しながら聴き、意思決定していくことが求められている。

討論の中で子どもたちが自分たちの力で問題を解決し、新たな問題が起こった時がもっとも良い討論のある問題解決的な学習を展開している時であると考えている。

教師のかかわりとしては、意見が詰まった時に、先ほどのメモをもとに教師から指名して発表させることもよい。

④振り返り

自分の考えを授業の最後にもう一度見直し、再構成する。振り返りを行うことによって、社会的な思考力、判断力、表現力を育てることができると考えている。

学習したことを振り返り、理解を深めるために「はじめは、〇〇と思っていましたが、△△さんの発言で、□□に変わりました。しかし〇〇さんの意見には反対です。なぜかという□□だからです。」というように、子どもたちが一時間の中で頭の中で考えた順に書かせるようにすると、書かせやすい。

振り返りを書かせることにより、文章を書くことに慣れ、わかりやすい文章や自分の考えを論理的に書けたりするようになって考えている。

この振り返りから、次の時間の問題が設定できることが望ましいが、これもなかなか難しい。

振り返りは、必ず教師が読み、子どもたちがどのような考えをもったかを知り、評価にもつなげることができるが、次時の授業をどう展開するか、どのような発問にするか、もう一度単元計画を見直すことが必要である。また子どもたちの振り返りには教師のアドバイスを必ず書いてあげたい。

（２）単元の展開

今谷順重編著「中学校社会科新しい問題解決的学習の授業展開」によると、以下の６つの過程を述べている。

①問題場面の発見

子ども自らが直接的に見、読み、聞き、味わい、感じ、触れ、かかわりながら、事実を見ることにより問題を発見する過程。ここでぜひ自分ごとと捉えさせ、興味をもたせ、自分で問題を解決したいと追究意欲を高めたい。

②心情への共感

その問題の渦中にいる人々がどのようなことを感じ、どのような気持ちになっているのか、その心情を当事者の立場に立って感情移入的に共用し合い、共感的に理解させる過程。授業の中では、「もしこの人だったら、みんなはどうする。」と発問することが多い。このことは、相手を思いやる優しさ等を育てることもできる。

ここでは、他者の感情に入り、共感したり、差異について考えたりしながら自分の立場を考え、自分の考えを表現することによって、思考力を育てることができる。

③原因の探究

なぜそのようなことになったのか理由や背景から原因をみんなで論理的に究明していく過程。

④願い・価値の究明

問題発生にかかわる様々な社会的状況に置かれた人々が、どのような願いや価値をもっているか究明していく過程。

⑤合理的意志決定（よりよい行為の決定）

知識・価値を関連づけながら、問題を解決するためには、自分がどのような行為を行うことがよいか主体的に判断し、意志を決定する過程。ここでは、解決（判断）するために考えられる多様な方法をできるだけ多く掲げ、もし実行した場合どのような結果になるか予測し、最後に自分がもっとも実行したいと考えている方法を選択する。すなわち判断力が問われることになる。

⑥主体的な社会参加

前時までに確定した最善の解決方法を実際に実行に移す過程。

これらの過程が社会科としての見方、考え方であり、より積極的に社会に参加するようになり、よりよい社会の形成者になる公民的資質の

基礎を養うことになると考えている。

6 なぜ社会事象を自分ごとにするのか

なぜ社会事象を自分ごとにすることが大切なのか。社会科の目標の一つには、自ら社会事象に関わろうとする意識を育てるということがある。

子どもたちは、自分ごととして捉えると自分とのつながりを理解し、そのことに入り込み、一生懸命考えるようになる。つまり社会事象について自分の考えを持つということである。このことは子どもたちが社会に関わろうとする意識を育てていることである。また社会科の一番大きな目標である社会の形成者を育てるということにも大きく繋がってくる。

社会事象を自分ごとにすることによって、より深い学習になり、自分ごとになった社会事象が知識、理解となっていくのである。

7 社会事象を自分ごとと捉えさせる手立て

（1）社会事象を自分ごとにする方法1…知識

子どもたちに社会事象を自分ごとと捉えさせるためには、今後の学習の中で自分の考えを持つときに必要な知識がなければならない。知識がない中での討論はなかなか深まらず浅い討論で終わってしまうことが多い。

子どもたちは、知識と資料等を関連付けながら自分自身の理解へと繋げていくのである。

（2）社会事象を自分ごとにする方法2…発問

以下のような発問をすることにより社会事象を自分ごとと捉えさせることができると考えている。

- ①「自分ならどうするか、またその理由は何か」
- ②「もしあなたが当事者だったら、どう思うか？どう行動するか？またその理由は何か」。

(3) 社会事象を自分ごとにする方法3…授業展開

- ①自分で考えたことが正しいか実証する展開
- ②自分たちで考えたことを実際に行う展開

(4) 社会事象を自分ごとにする方法4…教材

- ①実感的で実際の社会事象と結びつける教材
- ②資料や書籍により調べることが可能でなく、自分の五感を使って調べなければならないような教材

8 教師の姿勢

(1) 子どもたちの予想される反応

指導計画作成時に必ず子どもたちの考えることを予想する。これは児童理解の一つである。経験の浅い教師ははじめ児童理解ができていないために、なかなか子どもたちの反応を予想できず、子どもの立場に立った発問等を含めた授業計画を立てることが難しい。立てても実際に行ってみると、子どもたちがまったく予想もしなかった反応をし、戸惑っている様子をよく見かける。

できる限り多くの子どもたちの反応を予想しておくことによって、討論の際に「もっと他にもないかな?」とか「それだけで大丈夫かな?」と子どもたちに問うことができる。この予想がないために、数人の子どもたちから出た考えのみで話し合いが終了してしまうケースをよく見かける。予想しておくことによって、子どもたちに気づかせる問いかけをすることができるのである。

(2) 討論の中での教師のかかわり

討論を行っている際、教師はどのようにかかわることが良いのであろうか。

まず、討論が始まったら教師はできる限り話さないことである。

また、討論が行き詰ったとき、他の方向に流れてしまったときには、気づかせる→知らせる

→指導する、の順でかかわると良いと考えている。まずは子どもたちが気づく助言から行うことが大切である。

そのためにも、子どもたちの反応を予想し、どのような資料が必要かを考えておく必要がある。資料を使用する理由は、二つある。

一つは、子どもたちが討論の中で問題解決できず、討論が進まなくなった時に使用する資料である。二つ目は、さらに学習を深めるために使用するものである。討論を進めていると子どもたちが自分たちで解決方法を見つけ出してくることがあるが、この解決方法が、未熟であった場合等に使用し、学習を深めるための資料である。

(3) 教師がまず学習者になる。

授業づくりこそ、教師の本分であるが、なかなか授業を創れない教師が増えてきたように思える。それは多忙化が原因でもあると思うが、自分が目指している授業を持ち、その授業を創ろうという意識の差であると思う。ぜひ討論のある問題解決的な学習の授業を創ろうとする意識をもった教師になってほしいと思っている。

そのためには、まず教師が学習者になり、良い、必要だ、と思ったことを行動に移してほしい。こんなことをしてみたいと思ったら、すぐに市役所等に連絡し、係の話を聞く、どんなところかまず見に行く等良いと思ったことをすぐに行動に移すことができる教師の姿勢である。

子どもたちのために思ったことを一歩踏み出すことができる教師になってほしい。

9 実践例

実践1「3年生 買い物調べ」

(1) 単元計画(下線部自分ごとにする手立て)

- ①買い物はどこですか、なぜそこで買うかを考え、発表し合う。
- ②家の近くの商店を表にまとめ、地図に書き込み、発表する。

- ③買い物調べの結果を表やグラフに描く。
- ④自分の家の買い物調べから、わかったこと、疑問に思ったことをまとめ、発表する。
- ⑤家の人たちが普段どんなことに気を付けて買い物をしているか予想し、お母さんへの質問の仕方をみんなで考える。
- ⑥自分はこれから買い物をどこでしようと思うか考え、発表する。
- ⑦スーパーマーケットの工夫を考え、それを知るための見学時の質問等を話し合う。
- ⑧スーパーマーケット見学
- ⑨スーパーマーケットで働く人の様子をまとめ、発表する。
- ⑩スーパーマーケットの品物はどこから運ばれてくるか、資料で調べよう。
- ⑪買い物調べでわかったこと、気づいたこと、疑問点をノートに書き、発表する。

< 1 時間目発問 >

あなたはおかあさんに「キュウリを買ってきてちょうだい」と言われました。コンビニエンスストア、八百屋、スーパーマーケット、大きな商業施設（テラスモール湘南）の中のスーパーマーケットのどこで買ってきたらお母さんは喜ぶと思いますか？理由も考えよう！

・提示したそれぞれの店で買ったキュウリ

- ①A スーパーマーケット（住居よりちょっと遠方） 4本198円 群馬県産
 - ②B スーパーマーケット（大型商業施設内） 3本178円 群馬福島埼玉県産
 - ③生活協同組合（大型商業施設隣） 4本198円 群馬・福島・岩手県産
 - ④八百屋（住居の近所） 1本58円 福島県産
 - ⑤コンビニエンスストア（住居近隣） 2本105円 岩手県産
 - ⑥青果店（大型商業施設内Aスーパー隣） 1本55円 福島県産
- 導入の時間として、地域にあるいくつかの店

舗から実際にキュウリを購入し、自分だったらどこで購入するかを聞いた。

このとき子どもたちは、自分の答えを出した理由を問われることにより、自分が買い物した経験等自分の経験知の中から関係することはないのか、一生懸命引き出し、発問と関係づけて自分なりの答えを考えようとした。また、1本の値段を計算したり、同じ本数なのになぜ値段が違うのか、また新鮮さはどうかを考えたりすることにより、自分の意思を決定する根拠としての理由を考えた。

さらに実際に買い物をするということになる、子どもたちはキュウリの買い物を、より自分ごととして捉えることができると考えた。

そして、最後に自分の意見としてどの考えが良いのか、判断して自分の意見として意思を決定する。このことにより児童に判断する機会を多く持たせることになり、判断力が付くと考えた。

< 6 時間目発問 >

自分はこれから次のどの店で買い物をするか。理由も考えよう。

- A 家の近くのスーパーマーケット
- B 家の近く八百屋
- C 家の近くのコンビニエンスストア
- D 無人販売
- E 大規模商業施設内スーパーマーケット

店舗が自分の地域にあること、なおかつ今まで5時間学習してきたことを使って自分の考えを出させることがねらいである。

1時間目で、普段は新鮮、1本の単価が安い、車で行きやすいところで買い物をするが、急いでいる時等は場合によっては高くても近くの店で買うという意見も出されている。また3時間目では、自分の家がどの店で多く買い物をしているか、特徴を見つけている。その上での6時間目の発問のため、子どもたちはここでは、単なる生活経験知だけでなく、学習してきたことを使って自分の答えを出さなければならな

い。

このことによって、より一層自分ごととして自分の考えを持とうとした。

実践 2 「5年生自然条件と人々の暮らし（あたたかい地域の暮らし）」

<5時間目発問>

沖縄の家の屋根は「への字型」「平ら型」のどちらか？理由も考えよう。

沖縄は台風が多い、気温が高い、いつも海水浴をしているという意識はあるが、それ以上のことは知らない児童が多い。そこで具体的に私たちの住む地域と雨の量や気温にどのくらい違いがあるのかを知らせ、自分ごととして捉えるようにした。

3時間目に、地図帳から沖縄の地形の特徴として、川が短い、ダムがたくさんある、南の方に多くの人が住んでいる、製糖工場がある、パイナップルがとれるなどを学習している。そして川が短いためにダムを多く作らないと水不足になることがあることを理解させておいた。水不足の解消や台風を防ぐためには、「自分だったらどの屋根が良いのか」を考えさせ、討論させた。

実践 3 「5年生自然条件と人々の暮らし（高地の暮らし）」

<1時間目発問>

茅ヶ崎市と野辺山原（沖縄）の雨温図を作成し、違いを見つけよう！

野辺山原に行ったことがある子どもは少ない。行ったことのない場所の学習をするときに、少しでも子どもたちにその場所の様子がイメージできるような展開や資料が必要になってくる。

まず自分の住んでいる地域の雨の量や気温等を知らせた。その上で野辺山原の気候と比べたので、より実感的に野辺山原の気候を捉えることができた。

<5時間目発問>

なぜ野辺山原では、レタスや白菜の栽培が多いのか、理由を考えよう。

4時間目に茅ヶ崎と野辺山の地形の違いや高低差による気温の違い等を学習した。そして5時間目の授業で、それぞれの野菜がいつ頃栽培、収穫されるか菜園カレンダーを見て考えた。気温の違いによって、平地では暑くてレタスができないが、昼と夜の温度差の大きい野辺山では夏でもレタスができること、また大都市圏よりトラックで3時間程度あれば輸送できることに気付かせ、考えさせた。

実践 4 「安全な暮らしとまちづくり（災害からまちを守るために）」

もし学区の〇〇から火事が発生したら、あなたはどこへ逃げますか？理由も考えよう。

火事の恐ろしさを知らせるためには、どうすると子どもたちに火事を自分ごととして捉えるかを考えた。その結果自分の学区で火事が発生した際どこへ避難すればよいのかを考えさせた。火事が風により影響を受けること、また周りに建物があると燃え移ること等を考え、自分で避難する場所を探していくように学区図を用意し、考えさせた。

実践 5 「5年 湘南の砂防林」

自分で仮説を立てた湘南の砂防林の役割が正しいことを、資料や書籍がないため自分なりの方法でみんなに発表する実践であった。普段意識していなかった砂防林が自分の生活にとって大きな役割をもっていることを自分ごととして、切実な、実感的に感じることができた。

（1）湘南の砂防林とは

江の島から大磯の国道134号線の両側にあり、正式には「飛砂防整備保安林」と言い、海岸地帯の住宅や道路を潮風や飛砂の害から守る。飛砂を止めることにより、砂浜の減少を防ぐ、緑豊かな美しい景観を作る、騒音を防ぐ等の役目のために整備された。昭和39年昭和天

皇即位記念事業の時に、御大典記念魚付砂防林として黒松が植林、整備され、昭和47年に飛砂防備保安林に指定され、その後整備されてきた。昭和58年からは黒松だけの単純林から現在の混交密植した多層林へと形成された。

(2) 指導の手立て

- ・第一段階・感想の段階（関心や疑問を芽生えさせる段階）
- ・第二段階・個の問題を持つ段階
- ・第三段階・個の問題を共通の問題に練り上げていく段階
- ・第四段階・第三段階で練り上げた共通の問題について、自分なりの方法で調べたことをもとに、みんなで追究していく段階。
- ・第五段階・まとめの段階

(3) 指導計画

第1次・学校の紹介パンフレットを作り、特徴を話し合うことにより、風に注目させ「海岸の森林は風を防ぐためのものか」初期の課題を持たせる。…4時間

- ・パンフレット作製（2）
- ・学区の特徴を話し合い、風が強いことに関心を持つ。（2）

第2次・砂防林の広さ、面積、予算、植物の種類を知り、自分の調べたい問題を明確につかむ。…5時間

- ・砂防林を見学し自分なりの予想を持つ。（2）
- ・砂防林の資料から砂防林について知り、感想や疑問を出し合い、学習計画を立てる。（3）

第3次・「海岸の森林について調べよう」という問題をもとに、砂防林の役目、歴史、砂防林を守る工夫や努力、地域の人々の願いを調べる。…7時間

- ・潮、砂の飛ぶ量、騒音を様々な方法で調べ、砂防林の役目を捉える。（2）
- ・砂防林はどのような被害や苦勞があったのかを調べる。（2）
- ・砂防林を守るための工夫を考える。（2）

- ・地域の人々の願いを捉える。（1）

第4次・砂防林を学習した感想をまとめる。

…2時間

- ・砂防林について感想を書く。（1）
- ・感想を発表する。（1）

第5次・森林について考える…1時間

10 おわりに

このように討論のある問題解決的な学習を展開することによって、確実に、そして効果的に子どもたちの思考力、判断力、表現力は育てることができる。また子どもたちがかわる問題を子どもたちが自分ごととして捉えたとき、さらに効果的に思考力、判断力、表現力を育てることができる考える。

【参考文献】

1. 文部科学省『小学校学習指導要領解説総則編』2008年8月
2. 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』2008年8月
3. 文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集』～思考力・判断力・表現力等の育成にむけて～【小学校版】2010年12月
4. 今谷順重編著『中学校社会科新しい問題解決的学習の授業展開』ぎょうせい 1990年1月
5. 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』2017年6月